

燃ゆる城

かぶらやこうし
鎚谷嚙矢

阪城慎之介が、野崎隨賢から、不意の呼び出しを受けたのは、寛永六年（一六二九年）、夏のことだった。

待ち合わせたのは八幡神社の境内だった。

昼下がりで、あたりに人気はない。

「おぬしを見こんで話がある」

のっけから隨賢はそういった。

「近頃、よからぬ噂を耳にせぬか」

名前からも知れるように、隨賢は医者だった。

しかもその血筋が非常に良い。

三年前に死んだ領主、秋津大介忠勝あきつだいすけただかつの妾腹しよらうはくの弟で、本来ならば慎之介程度の身分では見えることすら叶わない相手だった。

阪城家は、無役の小姓組で石高わずか三十石である。

両親を二年前に失って兄弟も居らず、独り身の慎之介なればこそ、その石高でも何とかやりくりしていけるが、妻帯すればそうはいかないだろう。

妻は、多くの同僚同様、内職に精を出さねばならなくなる。

長らく母の苦勞を目にしてきた慎之介にすれば、そういった苦勞をかけると分かっていて妻帯する気にはなれなかった。

そんなわけもあって、慎之介は三十になるこの歳まで気楽な独り身を通していた。

小禄ころくの慎之介が、亡き殿の実弟と懇意にできるのには理由があった。

慎之介は、剣の腕前だけは城下で一、二を争う腕前なのだ。

七歳で剣を学び始め、十五の歳に城下随一と賞された、無外流むがいりゅうの普門院道しんもんいん場で目録を得ている。

以後、時代が平和に向かっている中、何を励みにここまで骨身を削るのか、と自らに問いながらも、今に至るまで研鑽けんざんを積み続けていた。

慎之介が、随賢と初めて言葉を交わしたのは、十年前の山吹神社の奉納試合じあいにおいてであった。

当時、随賢は二十五歳。

その頃より、藩の内外で随賢の剣名は轟いていた。

藩主である兄の希望で、随賢は試合を勝ち上がってきた者と勝負をするこ
とになった。

その相手が慎之介だったのだ。

慎之介は長身だ。

その、常人より首ひとつ高い上背で大きく上段に構え、立ち会った五人す
べてを瞬く間に打ち倒してきた。

だが、さすがに随賢は、それまでの相手とは違った。

上段に構えた慎之介を、青眼せいがんの随賢が、腰の据わった足運びで、ずいずい
と押してくる。

その、一見、落ち着いた所作の中に、うねりながら時折きらめく攻撃の気
配は、かつて慎之介が感じたことのないものだった。

容易ならざる相手だった。

時に、気合いを発して揺さぶりを掛けながら、慎之介は、随賢が、若き日
に二度の大坂の陣で死線をかいくぐり身を挺ていして兄を守り続けたという噂
に偽りがないことを知った。

やがて、流れるような動きで円を描きつつ後ろに下がった慎之介は、一瞬
の随賢の構えの乱れをみて、左に踏み込みざま鮮やかな袈裟斬けさざりを放った。

だが、随賢の足さばきも見事だった。

目にもとまらぬ速さで半歩後ろに下がると下から剣を跳ね上げる。

二人の手から同時に木剣が飛んだ。

最後に、慎之介が随賢の剣を巻き込むように受けたため、随賢も剣を引き

抜かれたのだ。

「それまで」

判じ役の塚田平九郎が鋭く叫んだ。

慎之介は領主忠勝を見た。

当時、三十二歳の忠勝は穏やかな表情で二人を見ていた。

「殿」

塚田に促され忠勝は口を開いた。

「よき試合であった。もう一番とってみよ」

澄んだ美しい声だった。

戦国時代の末期、風雲急を告げる中、父君長勝おまかつが病死し、家督を継ぐや豊臣を早々に見限って徳川方として大坂の陣に加わり、最年少の身でありながら、獅子奮迅の働きで確たる中山藩の地位を築いた領主の言葉は絶対だった。

慎之介と随賢は再び一礼すると、剣を構えた。

だが、結果は、三度取り直してみたものの、三度とも相打ちで勝負がつかなかった。

「貴殿きでん、強いな」

試合後、随賢が声を掛けてきた。

藩主の弟でありながら、権力に執着せず、医術を学ぶために諸国を回り歩いている随賢の物言いは、ざっくばらくたくんで屈託くたくがなかった。

当時は、慶長十九年（一六一四）の大坂の陣からわずか五年、戦火は収まったものの、いまだ戦国の気風が色濃く残っていた時代だった。

慎之介自身は、わずかに歳が足らず合戦には加わっていないが、この五つ上の領主の弟が、敬愛する兄を守るために剣の腕を磨き、戦場で兄の傷を見んがために医術を志したことは聞き知っていた。

実際に随賢は、一度ならず兄の命を救っている。

「恐れ入ります」

手ぬぐいで胸元の汗を拭っていた慎之介は、かしこまって答えた。

藩内において、この変わり者の藩主の弟は半ば伝説になっているのだ。

「剣さばきにのびのびとした筋の良さがある。これからも精進して殿を助けてくれ」

領主忠勝に面差しに似た涼しい目元に笑みを浮かべて随賢はいった。

以来、時折、道場で剣を交えながら、ふたりの親交は今に続いている。

三年前に、忠勝が謎の焼死を遂げると、随賢は藩主の座を当時七歳だった

忠勝の子、勝治に継がせ、自らは後見人となった。

だが、政治にはあまり興味を示さず、妻も娶らず、今も異国の文化華やかな堺へ西洋医学を学びに出かけては城の重鎮である老人たちから苦言を呈ていされているのだった。

「噂と申しますと」

慎之介は尋ねた。

「おぬし、わが藩についてどう思う？」

それには答えず、随賢は逆に問いかけてきた。

「小藩ですな。そして貧しい。だが、良い藩です」

慎之介は、齒に衣着せずそういった。

随賢はにっこりと笑った。

「その通りだ。わしもそう思う。だが、兄が死んで三年。もとより因縁のある隣国、川村藩が事あることに我が藩に嫌がらせを繰り返し、近頃では幕府に対して我が藩のお取りつぶしを働きかけている」

随賢の言葉に慎之介は頷いた。

その話なら城下で知らぬ者はない。

もともと、この中山藩二万石は、隣国、川村藩の領であった。

先代川村藩主、菱川隆俊は早くから徳川に与し、天下を二分した関ヶ原の役で著しい戦功をあげた名君だった。

だが、その後、慶長十九年（一六一四年）の大坂の陣の折り、豊臣方とのまさに最後の戦が始まるというその時期に、川村藩は、お家騒動で戦場に出遅れた。

本来なら取りつぶされても仕方のない失態だ。

それを免れたのは、藩主の妹、三和姫が將軍秀忠の重臣、土井利勝の遠戚へ嫁いでいたからに過ぎない。

だが、領地は、五万石から、およそ半分の三万石に減封された。

こういつた場合、無用の混乱を避けるために、国替えされるのが普通であったが、藩主、菱川歳綱は開祖以来の土地に執着した。

もちろん、減封、転封などの処置は、藩主の我がままで覆ることなどない。

おそらくは、ここでも土井利勝の力添えがあったのだろう。

川村藩は国替えを免れ減封のみの沙汰となったのだった。

「幕政などは女の尻で動くものよ」

今でも、酒の席でその話が出ると、中山藩士たちは、そう公言してはばからない。

余った二万石の土地に、大坂の陣で著しく戦功のあった忠勝が移り住んできたのだった。

もともと大和の国の一豪族に過ぎなかった秋津忠勝は、関ヶ原で豊臣方が不利と見るや徳川についた。その後、大坂、夏の陣で、忠勝は家康の計略によつて外堀を埋められ、仕方なく野に打つて出た豊臣勢と、それを迎え撃つ徳川勢、あわせて二十一万の軍勢が入り乱れる中、命がけの戦働ぎで豊臣の大將首を獲ったのであった。

戦功が認められ、確たる土地を持たなかった秋津家は、もともと川村藩の領地であったこの場所に国替えを命じられた。

以来、十四年。

慣れぬ土地、なじまぬ領民に苦勞しながらも、秋津家の家臣たちは何とか生き抜いてきた。

しかし、世が平和に向かいつつある今、幕府は、さらなる諸大名に対する締め付けを強め始めていた。

徳川の威信を世に示すために、戦功で一度渡した領地を、わずかな疵を暴き立てて滅封、改易し始めたのだ。

藩の大小を問わず、些細な失政を咎められて潰され、国替えを命じられる風潮に、多くの者が幕府による藩の整理が始まったことを強く感じていた。

どこの藩の侍たちも、関ヶ原と、二回の大坂の陣を経験し生き抜いてきた者たちだ。各々が、まだできたばかりの幕政に対して根強い不満を持っている。

太平の世が続けば、そういった考えは、なりを潜め、漫然と城勤めに精を出すようになるかもしれないが、まだそういう時代ではなかったのだ。

「まずこれへ座ろう」

随賢は、境内に大きく枝を伸ばした榎の木陰にある石を示した。

慎之介が座ると自分も腰掛ける。

爽やかな風が吹いてきて、慎之介の頬を優しく撫でた。

だが、随賢が重々しい口調で切り出した話は、そんな暢気な気持ちを一息で吹き飛ばすものだった。

「公にはされておらぬが、二日前から、国境で川村藩との小競り合いが起こつておる」

「本当ですか？」

慎之介は身を乗り出した。

「鷹狩りで逃げた獲物が、我が藩に逃げ込んだと称して勢子どもが藩内に入

り込んだのだ」

「なんと」

慎之介は呻いた。

もともと川村藩は、信濃しなのの国の南部にあつて、中央に高峯山たかみねさんという険しい山を抱き、それを取り囲むように発展した藩だった。

険しい高峯山が背後からの敵を防ぎ、山の幸をもたらし、山裾やますそを流れる仙三川せんそうがわが、豊かな土地と川魚を恵む良い土地だった。

幕府は、土地の分割にあつて、高峯山から東を川村藩、西を中山藩と分けた。

高峯山は、その真ん中が大きく切れ込み、深い谷を成しているため、それを利用した線引きであつたのだ。

狩場は、高峯山の麓にあり、ちょうど谷の出口に当たつていて、藩の境界線がその真ん中を通っている。

つまり、もともと一つであつた狩場がふたつに分けられた格好だった。

それ以外は、険しい岸壁が連なっているために人の行き来など考えられないため、実際にふたつの藩が接しているのは、なだらかな丘かりばの狩場のみであつた。

そこで、お互いの藩では狩場に柵を設け、張り番を置いて互いを見張っていた。

その柵を、川村藩の勢子が強硬に越えて領内にうち入ってきたというのだ。

これはあきらかに小藩である中山藩を侮った仕打ちだった。

世が世なら戦を仕掛けられたと思われても仕方ない。

幼君勝治かつほめの十歳という年齢を侮って、強気に押しているとは思えなかつた。

「そんな顔で見るな」

慎之介が険しい顔に鳴るのを見て、随賢は困つたように笑つた。

「本来なら、後见人であるわしが、幼君勝治を盛り立てて、川村藩にそのよ
うな真似をさせぬようにねじこまねばならんのだが、貴公も知つてのとおり、
わしは、未だ医術修行で国々を巡つておるゆえ、政治については」
そういつて、手のひらを打ち振り、藩主の叔父は、ぞくばらんな調子で
いった。

「ひどく未熟者なのだ。どうも城での駆け引きは苦手だな。戦働いくはたきの方が
性に合つておる。おぬしも知つておるだろうが、わしは妾腹めかけでな、長い間冷
や飯ぐらいだった。だが、兄は国をつくと、わしを引き立てて重用してくれ
た。それゆえ兄の役に立ちたいと一心に剣を学び、堺まで足を伸ばして、異
人からも医術を学んだ」

慎之介は頷いた。随賢の医者としての腕は、かなりなものだと聞いている。
「それが性にあつたのか、政治よりはそっちの方が得意になつてしまつたの
だ。だが、さすがに今回の件は腹に据すえかねる。加えて奇体きたいな噂も耳に入つ
てきた」

随賢は顔を曇らせた。

「その噂とは」

「兄上が、何か恐ろしいものを隠したまま死んだ、というものだ」

随賢の声が小さくなった。

「恐ろしいもの、と申しますと」

慎之介も声を潜めた。

「それはわからん。だが、それさえあれば、わが藩が川村藩に対して優位に
立てるほどのものらしい」

近頃の、石高こくたかの差を笠に着た隣藩の仕打ちには、日頃温厚おんこうな随賢すら腹立
たしく思っているらしい。

「大筒おほつつか、あるいは火薬ひやくすりの類たぐいかもしれませんな」

ほんの少し年が足りなかったため、戦に出ることが許されなかつた慎之介

は実際には知らないが、関ヶ原や大坂の陣のおりは、鉄砲や大筒が大いにものを言ったものだということは知っていた。

「そうかも知れぬ。だが、だとすると少々まずい」

「そうです。鉄砲、大砲、火薬が藩内にあるとなれば、反対に我が藩が危うくなります」

「大坂の陣が終わって十数年。幕府は徐々に膨らみつつある諸藩の不満を恐れている。こんな時に、もし数多くの鉄砲や大砲を隠し持っていることが知れば、それだけで藩はお取りつぶしになるだろう」

はっと、慎之介は気づいた。

「もしや、川村藩は、それを狙っているのでは」

「それはまだわからぬ。だが、あるいは先日の勢子の乱入は、その布石ふせきやもしれぬな」

「なんと」

だが、慎之介の顔を見て、随賢はからっと笑った。

「まあ、そつ心配顔をするな。俺は大筒などが我が藩にあるはずが無いと思っっている。いや知っっている」

「そうでしょうか」

「確かに兄は英邁えいまいな君主であった。世の中がそのまま定まればそれでよし。だが、もし、もう一度、天下を二分する戦があるとすれば、その戦をうまく乗り切るために、我らのような小藩が生き残るためには鉄砲が必要だ、と準備をしていたか。あるいは、そこまで考えずとも、この地に来て以来、絶えたことのない隣国との小競り合いを考えて、そついった武器を用意しようと考えたかも知れぬ」

「ならば」

「落ち着け慎之介。兄は、そう考えたかも知れぬが、よく考えてみよ。お前を始め、藩士のほとんどが分かっているだろうが、我が藩には、そんな余分

な金はない。これといった特産物もなく、田畑も、肥沃な土地をは川村藩に取られ、日々、汲々として暮らす我々が、いったいどのようにして金を貯めることができようか。民を酷使して、年貢を絞り上げれば多少の蓄えはできるかも知れぬが、兄には、そのようなことはできなかつたし、やらなかつた。それはわしが一番よく存じておる」

随賢の言葉で、慎之介の目に御前試合で見た忠勝の穏やかな眼差しが蘇つた。

藩主、秋津大介忠勝は、心優しき名君であつた。

中山藩が、この地に転封された当初、寒い土地に慣れぬ家臣と農民たちとの間に対立が生じ、作物を枯らし、軽い飢饉を招いたことがあつた。

その際に、忠勝は、すぐに城の藏を開け、金銀のほとんどもを使って領民を飢えから守つたのだつた。

「確かにそうでございますな」

「お前も覚えておろう。六年前の多賀村のこと」

そう言つて随賢は微笑んだ。

慎之介も頷く。

六年前、高峯山の中腹にある多賀村に一人の男が担ぎこまれた。

獵師が、けもの道で行き倒れている修験者を見つけたのだ。

本来、旅人はすべて街道や関所を通らねばならない。

それは修験者といえども例外ではなかつたが、古来より道なき山道を走り続けてきた彼らには、時の政権に対する畏敬の念が欠けている場合が多く、許可無く修行のために山入りする者が後を絶たなかつた。

それまでも、獵師の中には、山中で何度かこつといった修験者と出会つて
いるものがいた。

本当であれば、すぐにお上に届け出なければならぬのだが、村人たちは

そうしなかった。

村の掟や幕府の定めは、たかだか数年、あるいは数十年のものだが、修験道には数百年の歴史があるからだ。

村人は、男を庄屋の源右衛門の離れに運びこんだ。

すぐさま村医者が呼びにられる。

医者は、男を見ると、飢えと過労による病だと庄屋に告げ、とにかく静かに寝かせておくように言いおいて帰って行った。

翌朝、男を見舞った源右衛門は、狂ったように離れから飛び出ると、半鐘を叩いて村人を集めた。

修験者はすでに死んでいたが、その顔には、不気味な赤黒い斑点が浮かんでいたのだ。

男は、明らかに流行病にかかっていた。

その夜、修験者の看病をしていた源右衛門の娘の加代が倒れた。

やがて、多賀村一帯に病は広がり、程なくして忠勝のもとにもその知らせが届いた。

当時まだ平地に城は普請ふしんされておらず、忠勝は、かつて川村藩の山城であったたか 鵜城ういに起居きょしていた。

山城と多賀村は、間に黒滝村という寒村を挟んでいるだけで、ほとんど離れてはいなかった。

藩の重臣は、病を恐れて城を出ることを勧めたが忠勝は聞かなかった。

急ぎ、黒滝村を無人にさせ、簡単な小屋を掛けさせると、病の程度に応じて多賀村の病人を運び込んだ。

その指図を忠勝は先頭に立って行ったのだった。

並の藩主にできることではない。

忠勝の素早い処置のおかげで、亡くなったものは、最初に病人に触れた加代と老人数名だけだった。

「あの時は、ご用医師の山岡宗道殿のおかげで病が広がらずにすんだ」

「あなたが、異国の医者から学ばれたことを、広く領内の医師に伝えておかれたからです」

本心から慎之介が言った。

随賢が、長年にわたって諸国を回りながら集めた医術の知識は、平易にかみ砕いて広く藩内に伝えられていた。

それゆえ、流行病が始まって、これは疱瘡(天然痘)だ、これは麻疹だ、あるいは水疱瘡(水痘)だと皆が知っており、その対処も早く、病が広がらない。

そういつた瑞賢の努力のおかげで、多賀村の村人にも、ほとんど被害は出なかったのだ。

隣村の黒滝村には、子供の頃から慎之介を可愛がってくれた、通いの庭師の六兵衛が住んでいたのだが、領主の素早い判断のお陰で難を逃れている。

その後、多賀村と黒滝村へ通じる道には柵が作られた。

「いや、あの頃、わしは再び医術修行のために、諸国を回っておったために、直裁に民を救うことはできなんだ」

「だが、あなたは、その後の山鼠の時に獅子奮迅の働きをされました」

五年前、高峯山の中腹から火が出た時に、山から麓めがけて野鼠の大群が押し寄せたことがあった。

その時は、藩内に戻っていた随賢が、溝を掘って油を流して火をつけ、鼠を川へ落とし込んで作物を守ったのだった。

慎之介の言葉に随賢は相好を崩した。

「後にも先にも、あれほどの鼠の大群をわしは見たことがない」

そこで言葉を切り、いや、あるなとつぶやき、

「夏の陣の二十万の人並みが、わずかにあれに似ていたか」

そういつて笑う。

「そういえば、あの時の野鼠はどうなりました。たしか、殿が命じられて、誰かに鼠を調べるように命じられたはずですよ」

「そういえば、そんな話もあったな。だが、わしは次の旅の用意に追われていたので詳しくは覚えておらぬな」

「殿も物好きなことをされる、と密かに我々も話したものです。なんでも、鼠の癖を調べて、次の機会に備えるためと聞きました」

随賢は寂しげに笑った。

「血というものかも知れぬな」

その声の寂しさに、思わず慎之介は随賢を見た。

「わしもそうだが、兄上も、そういった調べごとが好きだったのだ」

ふと遠い目になって、

「確かにわしは戦場で兄を守るために医者になった。だが、そうでなくとも、やはり医者になっていただろう。兄上もそうだ。国主でなければ、一介の町医者として世を送ったかもしれぬ。そういった血が、我々には流れている。旅から帰るたびに、わしは殿に仕入れてきた医術の知識を話したものだ」

随賢の声音の暗さに絶えかねて、慎之介は話題を変えた。

「あの時、鼠を飼うように命じられたのは誰だったか、本当に覚えておられませぬか？」

「確か、町医者の誰かだと思ったが、しかとは分からぬな」

いつのまにか、日が少し傾き、吹く風も先ほどよりも涼しくなってきた。

思いついて、慎之介は口を開いた。

「先ほどあなたは我が藩には武器を買つ金などないと申されたが、それは本

当のことでしょうか」

物思いに沈んでいた随賢は、臆気な眼差しを慎之介に向けた。

「何のことだ」

「昔から言われている隠し金のことですよ」

「まさか、貴殿はそんな戯れ言を信じているのではなからうな」
随賢は一笑に付した。

「旅を続けていたとはいえ、わしは国主である兄に最も近かった。その兄上
が、わしに隠してそのような金を隠しおおせるわけがない」

「しかし、もしそれが、例の太閤の金ならば」
随賢は口到人差し指をあてた。

「おい、声が大きいぞ。いくら人気のない場所だとはいえ、豊臣家のことは
軽々しく口にしてはいかん」

「申し訳ありません」

そうは言ったものの、慎之介は納得ができなかった。

その顔色を読んでか、瑞賢はいった。

「今、中山藩の財政がいかにかしいかは、そちも分かっておるう。もしその
ような金があれば、真っ先に棧敷沼の干拓を進めていたはずだ。そうすれば、
我が藩の台所はもっと潤うことができる」

「ならば、殿はなぜ野副川の流れを急いで変えられたのでしょうか」

野副川は高峯山を斜めに横切って流れる川で、川村藩から中山藩にかけて
流れていた。

忠勝は、その川へ向けて堰を切り、あたかも城下町を迂回させるような形
に川の流れを変えたのだった。

川自体は、領地の西にもう一本、仙三川という大きな川が流れているため
に、領民がそれで困るということは無かったのだが。

忠勝公が亡くなる半年前のことだった。

「確かにあれは妙だった。兄は治水だといっておられたが……。あるいは南
の端の土地、今はまだ荒れ地のままだが、いずれはあれを開墾して農地にさ
れるつもりだったのかも知れぬ。そのための治水であったのだろう。いつも
先を読む人であったから」

随賢はそこで言葉を切ると、

「どうだ、噂を確かめるのを手伝ってくれぬか」

慎之介の目を見て尋ねる。

「もちろんです」

慎之介は力強く請け負った。

どうせ、月に一度だけ城に顔をだす無役の小姓組こしやくぐみに過ぎぬ身だ。

養う家族がいるわけでもない。

磨き続けている剣の腕前も、太平の世では無用の長物であるし、時代がどのように平和に向かっているれば、剣をもって世に出ることも、もはや叶かなわな
いだらう。

そんな諦あきらめに似た、やるせない気持ちに捕らわれ始めていた慎之介にと
って、随賢と共に亡き殿の残された秘密を探ることは願ってもいないことだ
った。

「何から調べましょう」

「その前」

随賢は石の上に座りなおした。

「わしが、今の噂を聞いたのは中老ちゆうらうの藤井弘泰ふじひろやす殿からだ。まずは、その話
をしよう」

随賢の話は、おおよそ以下のようなものだった。

今から半月ほど前のことだ。

春先に、医術の研鑽けんざんのために留とどまっていた堺を出て、大和、京、近江と渡
り歩き中山藩に戻ると、随賢は、荷をほどくのもそこそこに、中老、藤井弘
泰を訪ねた。

藤井が、かねてより京の音羽焼おとわやきを欲しているのを聞いて、京を訪ねた折
りに丸茶碗まるちやわんを手に入れていたからだ。

随賢と藤井は大坂の陣で共に戦った仲だった。

親子ほど歳の違う二人であったが、不思議と気が合い、その間柄は主従というより、友がきというものに近かった。

総領そうりょうの叔父しやくふという随賢の身分を藤井は気にもとめていないため、他の重臣の誰よりも気楽に話ができるのだ。

戦場いくばばでは大槍を振り回し、獅子奮迅ししぶんじんの働きを示した藤井だったが、今は、五十の坂を越え、昨年生まれた孫の顔を見るのが一番の楽しみだといいながら手土産てみやげの茶碗に涙ぐむのを見て、随賢の胸に、痛みとも悲しみともつかない思いがわき上がった。

ひとしきり藩の主だったものの近況を聞いた後、しわぶきをひとつとして、老人が切り出した。

「ところで、最近、妙な噂を聞きましてな、虎之助殿」

虎之助は随賢の幼名だ。

子供の頃から随賢を知る藤井弘泰は未だにその名で呼ぶ。

「噂というと」

「鵲城かきりぎに幽霊が出るらしいのです」

「ほう」

随賢は感心したように頷いたが、もちろん信じてはいなかった。

「どんな幽霊です。美人ならわたしも見てみたいものですな」

「それがどうも男らしいのです」

随賢の表情が強張った。

「まさか、兄上の幽霊ではないでしょうか」

藩主忠勝は、三年前、無人の山城である鵲城で謎の焼死を遂げてるのだ。

「いや、殿ではない。もっと小柄で小太りの男の幽霊だそうです」

「ははあ、それはどうも色気の無い話だ」

「いやいや、と、老人は手を振って、

「色気どころか、もつときな臭い話でしてな。その男が、なぜ現れるかという、忠勝公が残した、隠し財産を我らに教えるためだということです」

「隠し財産」

「いや、これには諸説ありまして、鉄砲二千丁だという者があり、大砲二百門という者もいる」

「なんとも愚かしい」

声を上げて随賢は笑った。

だが藤井は笑わず、

「困ったことに、噂の中には、この地に移り住んだ当初から噂になっている、太閤の隠し財だというものもあるのです」

「ああ、あの豊臣家が、一朝事ある時のために金銀の一部、あるいは鉄砲、大砲を信濃の山奥に隠そうとした際、崖崩れで荷が行方知れずになったという、あれですか」

「そう、昔から、よく人の口にする隠し財ですな」

「しかし、あれは、いわば、貧なる我が藩の夢まぼろしに過ぎないでしょう。わたしの考えるところ、その鉄砲も大砲も金銀も、昨今の川村藩の横暴に業を煮やした者たちの夢物語に過ぎませんな」

「しかし、その荷を、先代川村城主、菱川隆俊が掘り起こしたからこそ、信濃の国の弱小藩に過ぎなかった川村藩が、徳川方の中で一躍重きをなしたという噂もある。それに、関ヶ原の前に、突然、川村藩が鉄砲や大砲などの武器を増強したのは本当ですぞ」

藤井の言葉の熱さに押され気味になりながらも随賢は言った。

「その宝のありかを知らせぬまま、前藩主、菱川隆俊が卒中で亡くなり、続くお家騒動で、城を我らに明け渡したはいいが、今になって、かの山城に財宝を残していたことが判明し、それを取り返そうとしている、というのですな」

「噂では、そうです」

「しかし、あなたもご覧になったでしょう。その噂を信じた訳ではなかったが、九年前に我が兄、忠勝の指図を受けて、われらも、畳の一畳、天井板の一枚までがし、庭も掘り返して調べたはずですが、何が、何も出てこなかった」

「探しようが悪かったのかもしれない」

「やれやれ」

随賢は首をふった。

諸事情から、中山藩では他藩のように年貢の取り立てを厳しくはできないため、何とか別の財源を手に入れない、あるいは川村藩にものを言わさぬための鉄砲大砲が欲しい、という藤井の気持ちは、よくわかるからだ。

転封てんほうというのは、ただ単純に国が引っ越しするということではない。

藩主や家臣は、財産をもって移動はできても、武器ぶきは持っていけないのだ。

それらは次の城主が引き継ぐことになる。

また、家臣の奉公人は連れていけるが、町人や農民は連れていけなかった。

実はこれが一番の問題になる。

十四年前にこの地に転封になった藤井たちが、もっとも心を砕いたのは、突然、領主が変わってしまった農民たちの扱いだった。

同様に、転封になった多くの藩が、農民の心をつかめずに失敗していた。そういった藩では、家臣と農民たちの間に気持ちを通い合わず、農民たちが働く気持ちを失ったために米が不作になり、しまいには一揆いげんまがいの暴動が起こるのだった。

幸い、忠勝は、年貢の取り立てを一時緩めるなどして、領民の心をうまく掴つかんでいたため、旧川村藩の領民たちは、あからさまな不満も示さず、よく藩政に従っている。

しかし、この先、藩の財政が苦しくなれば、年貢を上げざるを得なくなり、
そうなると、農民たちの不平をかわすことができなくなるかもしれないのだ。

「藤井殿は隠し財産があると信じておいでなのですか」

話し終わった随賢に、慎之介は尋ねた。

「その様子だった」

「しかし、奇体きたいですな。どうしてこの地に移ってから十四年も経ってからそんな話が出てきたのでしょうか」

「わしもそう尋ねてみた。だが藤井にもそれは分からぬらしい。要するに藤井はその話を信じただけなのかも知れぬ」

そういつて随賢は立ち上がった。

別れ際、随賢は、しばらく自分で調べてみて、もう少し詳しいことが分かったらまた呼び出すと言った。

慎之介は頷いた。

何か手助けをしたかったが、身分の低い自分が随賢と供に動いても足手まといになるだけのような気がしたのだ。

「どうしたんです、若旦那」

不意に、お里が顔をのぞき込んでそう言った。

慎之介は、随賢と別れたあと、その足で、居酒屋、徳正に立ち寄って、考え事をしながら安酒をちびちびとやっていたのだ。

考えることならいくらでもある。

また、慎之介は、生来、物事を深く考える性質たちでもあった。

目の前に置かれた問題を、ためつすがめつ、嘗めるように色々な向きから考えてしまうのだ。

「本当にどうしたの。むっつりと黙り込んでさ」

お里は、すぐそばまで顔を近づけ、にっこりと笑った。

杏あんずに似た甘いにおいが慎之介の鼻をくすぐる。

その態度には、慎之介が武士だからといって、まるで臆したところはなかった。

お里のそんな態度が最初のうちは少し気になったが、酒手さかても満足に払えず、ツケで飲み続ける自分を重く見るといっほつが無理なのかもしれないと、近頃では慎之介は諦めている。

「何をいう。俺はいつものとおりだ」

「うん」

お里はおつかぶせるように言って慎之介を見た。

「若旦那には、何か心配事があるのよ」

その黒目がちな大きな瞳に見つめられると、慎之介は自分の考えを全て読まれているような気になって、落ち着かなくなるのだった。

真之介は、徳正を、六年前に父が身体をこわして家督を継いだ時、当時、雇っていた甚八ひんぱちという使用人に連れられて、初めて訪ねたのだった。

「奥の座敷では、お武家さんもよく見かけますよ」

そういって甚八は、亭主の徳治とくじに慎之介を紹介した。

その頃、阪城の家は下僕を雇っただけのゆとりがあった。

まだ藩もこの地に移ったばかりで、様々な仕事如山積しており、それらのおつかを兼任することで、禄ろく以外に幾ばくかの実入りもあったからだ。

だが、それも慎之介の代には消えてしまった。

当時、お里はまだ十三だった。

幼くして母を亡くしたお里は、子供ながらも店に出て手伝いをしていた。手に余る大きな盆の上に、酒さけの肴さかなや銚子ちょうしを乗せて懸命に運ぶのを可愛く

思い、飴などを手に入れてよく与えたものだった。

賄賂わいろが効いたのか、お里は慎之介によくついた。

最初の日に、甚八が慎之介を『阪城の若旦那』と紹介したために、お里は、彼を若旦那と呼ぶようになった。

その頃の、目ばかり大きくて手足が細長く、触れれば壊れそうだった子供が、今や豊かに実った胸と腰を持って、自分の前で息づいているのが慎之介には不思議だった。

いや、黒目がちの目だけは、子供の頃と変わっていないな、濡れたように大きな目を見ながら慎之介はそう思った。

見つめ返されて、お里は、つと目をそらせる。

頬を微かに染めながら立ち上がり、

「あ、お酒が切れてる。まだ飲むんでしょ」

そう言っ、盆の上に空になった銚子を乗せて板場いたばに戻って行った。

その後ろ姿に、子供の頃の痩せた娘が重なった。

ことし十九のお里は出戻りだった。

二年前に一度嫁にいき、半年後に離縁りえんされて戻ってきたのだ。

詳しいことは聞いてはいないが、相手の男が母親べったりで、箸の上げ下ろしまでうるさく言われ、いじめ抜かれたらしい。

だが、意にそぐわぬ生活であっても、その半年で確にお里は変わった。年の割には細かった手足や腰に優しく肉がつき、首筋から色気が匂つようになった。

お里は女になって帰って来たのだ。

嫁ぎ先で、どのような苦労があったかは知らないが、お里は、それを慎之介には見せなかった。

そつえば、お里は、まだあのことを覚えているのだろうか。

久しぶりに昼から飲んだためか、思ったより酒が回り始めていることに気づきながら、慎之介はぼんやりと考えた。

嫁ぐ前、冗談交じりに、お里は、ほんとは若旦那のお嫁さんになりたかったと慎之介に呟いたのだ。

だが、家に戻ってからのお里は、親しげではあるが、はっきりと慎之介との間に線を引き、そういった気持ちをあからさまに示しはしなかった。

板場から酒を運んできたお里は、

「はい。もう一本。でも、もうこれでやめたほうがいいわね」

そういって、細い指先で盆の上のものを台に移した。

さっと店を見渡して客の様子を見てから、慎之介の向かいに腰掛ける。

「若旦那が、考えているのは、誰かいい人のことですよ」

「そんな女はいないさ」

むっつりとした表情で慎之介は言った。

「あら、だって若旦那、もう二十九でしょう」

「三十だ」

「だったら奥方をもらわないと。お世継ぎも必要でしょう」

きわどいことを言うが、あっさりとした言い方なので、いやらしさも嫌みも感じない。

「若旦那には、家で待つ奥方が必要なんですよ。若くて、初々しくて、まっ

さらな奥方が」

お里が、どついつ気持ちで、そう言っているのか分からない慎之介ではなかったが、それを無視して、そっけなく答える。

「俺には、そんな気もないし金もない。妻を娶めとることができなくらいなら、

ここで、ツケで飲んだりはしないさ」

そうそう、金といえは、と慎之介は、お里に隠し金の話を尋ねてみた。

「ああ、その話だったら知ってますよ」

あつさりとお里は言った。

「ほう。やはり人が集まる場所のことはあるな。そんな噂が広まっていたか」「いいえ、違いますよ若旦那。半月ほど前の、六件堀の読売（瓦版）にそんなことが書いてあつたんです」

「なるほど、読売か」

近頃、京からやってきた彫り師が、世の中の事を面白おかしく落首調らくしゅじょうに書いて紙に刷り、安く売る商売を始めているという事は慎之介も聞いていた。

「しかし、お里が字を読めるとは思わなかったな」

関心する慎之介に、お里は慌てて手を振った。

「いやですよ、若旦那。あたしは字なんてほとんど読めませんよ。でも、読売には絵もたくさんついでいて、それを見ればだいたいわかるようになってるんです。江戸であつた心中とか仇討ちなんか」

そう言われて、慎之介は、読売が、別名絵草紙えそうしと呼ばれていることを思い出した。

「その読売は、どこにある」

お里は顎に指を当てて考えた。

「さあ、しばらくは店において、お客さんに見せてましたけどね。いつの間にかなくなつたんじゃないかしら」

「それでは仕方ないな」

翌日、その読売を売り出した男を探して慎之介は城下を歩いた。

意外にも、さほど苦労せずに売り子を見つけることができた。

源吉というその読売の売り子は、二十過ぎの、しまりのない口元をした男だった。

肩を抱くようにして、近くの一膳飯屋いちぜんめしやに引き入れると、親父に酒を頼む。

酒が来ると源吉にすすめた。

源吉は、嫌いな方ではないよつで、酒を飲み干すと、すぐに勢いよく杯さかずきを突きだした。

だが、慎之介が、財宝の話題を誰から仕入れたかを尋ねると、

「何も知らねえですよ」

急に源吉は怯おびえた目になった。

酒を飲む手が止まる。

「いや、何も内容が良くないと、お前を締め上げようというんじゃない。ただ、誰からこの話を聞いたのかを知りたいだけなのだ」

慎之介は穏やかにそう言ったが、源吉は黙ったままだった。

仕方なく慎之介は奥の手を出すことにした。

貧乏暮らしを長く続け、お里を初めとする町人との付き合いが長いと、こつといった時に役に立つ。

「では、金で話をしようではないか。もし、誰から聞いたか教えてくれたなら、お前に二朱払ってやる。どうだ」

随賢は、当座の費用だといって、二両を慎之介に渡してくれていた。

懐は暖かいのだ。

もし、今手にしている手裏てじゅるが役に立ちそうなら金を出し惜しみすることはない。

だが、源吉は押し黙ったままだった。

慎之介は、自分の住まいを源吉に教えると、考えが変わったら訪ねてくれと言いついて飯屋を出た。

その日は、一日、随賢から連絡はなかった。

夕方まで家で待ったが、誰も訪ねて来ないので、慎之介は徳正に出かけた。好物の豆腐を肴に酒を飲む。

お里をからかい、酒を飲むうちに時間が経ち、徳正を出た時は、五つ（午後八時）をとくに過ぎていた。

家に帰ると客が待っていた。

ほろ酔い気分で足を運び、待つ者のいない、明かりのない家に近づくと、門の側にひとりの男が立っているのに気づいた。

小柄で小太り、丸い顔に丸い目で、尖った鼻が猫を思い出させる男だった。

「阪城慎之介というおさむれえはあんたかい」

「そうだ」

慎之介が答えると、男は、自分は孫八という者だが、読売の売り子の源吉から聞いてやってきたと言った。

「まあ、あがれ」

そういって、家に入るとすぐに火をおこし蝋燭に火を点けた。

孫八を上がりがまぢ框がまぢに腰掛けさせた。

黄色く揺れる炎の中で、孫八はますます猫に似て見える。

「それで、源吉はどうした」

「とても、とても。ぶるうちまって駄目です。あつしは一緒に行こうって誘ったんですがね。まあ、読売のねたを仕込んだのはあつしでやすから、源吉は関係ねえと言えば関係ねえんだが」

「それで、どんな話をしてくれるのだ」

男の言葉を遮って慎之介は言った。

「その前に、話をすると二朱貰えるってのは本当でしょうね」

「その通りだ」

そう言っって慎之介は懐から金を取り出して床に置いた。

孫八の目が素早く左右に動いて、それに釘付けになる。

二朱といえば一両の八分の一だ。

少ない金ではない。

「さあ、話せ」

慎之介が促すと、孫八は話し始めた。

「あつしは、もともと甲斐の国の獵師の出でしてね」

そうか、と相づちを打ったものの、太りすぎた猫のような印象の孫八は、慎之介には、とてお獵師だったようには見えない。

「といつても、あつしは鉄砲も弓矢も得意じゃありませんので、獵師仲間からは、あまり腕の良い方だとは思われていやせんでした。ですが、昔から鼠を退治するのだけは得意でした」

「何が得意だつて」

「鼠退治ですよ。旦那。お武家の旦那とは違って、あつしたちは、生まれた時から鼠と付き合っておりますからね」

それを聞きながら、俺の家にも鼠ぐらいはおる、と思つたが、自慢することではないので慎之介は黙っていた。

「こんなことを言うのはなんですが、信濃国、甲斐国を合わせても、あつしほど鼠扱いのうまい者はおりませんよ。あつしには鼠の考えが分かるんでさ。どつすればどこへ逃げるか、何をすれば嫌がつてよその藏に移っていくか、なんてことがね」

慎之介は、改めて孫八の顔を見た。

さすがに猫に似ているだけのことはある、と感心する。

「この腕を生かして、あつしは獵師をやめて、米倉の鼠退治でもつぱら働くようになりやした。しかし、いざ商売として始めていると、これがまた思つたよりも、きつい仕事でして……」

「おい孫八」

鼠談義を続ける小男を遮さへつて慎之介は言った。

「お前はいつたい何の話をしに、ここへきたのだ」

話の腰を折られた格好の孫八は、不満げに頬を膨ふくらませた。
ますます猫に似てくる。

「旦那が知りたがってる事ですよ。お山の城から、あっしが見つけた金と鉄砲のことです」

「なに」

思わず慎之介は立ち上がった。孫八の首を掴み上げている。

「だ、旦那、苦しいですよ」

孫八の言葉で漸く正気に戻った慎之介は、襟元をただしてやると言った。

「さあ、続きを話してくれ」

「さつきも申しましたように、あっしは鼠の扱いに慣れた男なんです。そして、どこで聞きつけられたのか、お殿様が直々にあっしに、鼠のしつけを頼まれましたね」

「殿というと、忠勝公か」

「そうです。五年前の春先でした」

五年前……と声には出さず舌の上で言葉を転がすと、頭に閃くものがあった。

「すると、お前なのか、殿に雇われて鵜城で鼠を飼っていたのは」

「へえ、隣の川村藩のやつらが鼠を放って、この藩の作物を荒らそうとしているから、まずは鼠を捕まえてくれ、と言われました。その後で、できるなら鼠をしこんで、逆に川村藩に鼠を攻め込ませられないか、と殿はおっしゃったんです」

うつむ、と慎之介は唸った。

てつきり町医者あたりが鼠を扱っていたと思っていたのが、とんだ考え違いだった。

「それでどうした」

「へえ、あっしは、山城の近くに小屋を掛け、大きな籠と柵を用意しやした。で、鼠を捕まえては、その中に放り込んでそいつらを、しつけ始めたんです。

ところが、しばらくして、鼠がやっと言うことを聞くようになったところに、

殿様が突然、お城の天守閣で焼け死になさった」

「五年前といえば、もう城は麓ふもとの平城ひらやしろに移っていたんだな」

「へえ。あの辺りは静かで、人っ子ひとりいねえんで鼠の訓練にはぴったりでしたよ」

その声を聞きながら、慎之介は、なぜ殿は孫八を雇って鼠をしつけたのだからと考えていた。

孫八が言うように、ただ川村藩の田畑を荒らすためだけなのだろうか。

「しかし、どうもあつしには、城のどこかに隠し部屋があるように思えましてねえ」

孫八の容易ならざる言葉に、慎之介は考え事から気持ちを引き戻された。

「それはまことか」

「たぶん、そうだと思いますよ。今思い返すと、殿様ともう一人の男が、いつも城の入り口付近でうろつくと歩き回っていたような気がするんです。話しかけようと近づくと、まるで神隠しにあったように二人とも消えちまう。あつしが走り回って城中探しても見つからねえ。で、しばらくすると、また、ぱっと現れるんです。あれはどこかに隠し部屋があるに違いありませんよ」

「どこに行くのかと聞いてみなかったのか」

孫八はぶるつと身震いした。

「とんでもない。お殿様の近くにいただけでも空恐ろしいのに、こちから話しかけるなんて滅相もない」

「しむ……」

慎之介はそう呟き、

「殿と一緒にいたという男はどんな顔をしていた」

そう尋ねた。

「顔といいましてもねえ。いつも遠くから見かけるだけでしたんで、はっきり

りとはわかりやせんよ」

「そうか、なら背丈はどうだ」

「へえ、旦那の顎のあたりでしょうか。あつしよりは背が高いと思いやす」

「中背ということだな」

「ああ、それと八の字髭と顎髭を生やしていやしたね」

「中背で八の字髭か……」

その人相に当てはまる藩の重職たちはいなかった。

まさか、まず人の来ることのない廃城で変装をしているとも思えない。

今のところ忠勝公と一緒にいた男が誰なのかは見当がつかなかった。

「それで、金と鉄砲は、どうして見つかったのだ」

「へえ、殿様が亡くなって、八の字髭もどこかにいっちまったんで、あつしはどうして良いかわからなくなっちゃったんでさ。お城からやって来たご家老たちは、殿様から、あつしのことなんか何も聞いてねえ、出て行け、と、えらい剣幕だったしね」

「金はもらってたんだろっ」

「殿様が亡くなられた時、一年分を前払いでいただいております。ですから、出て行けと言われてもすぐにはそんな気にはなれなかったんでさ。そこで、もうしばらく鼠たちを仕込むことにしたんでさ。」

なに、本当のことをいうと、鼠の仕込みが結構うまくいって、面白くなってきたばかりだったんで、そのまま逃がすのが惜しくなっただけなんですけどね」

「律儀な奴だな」

慎之介はあきれたように孫八の顔を見た。

「鼠どもの仕込みの中に、一度、逃がして笛の合図で。もう一度集めるってのがありますが、それを何度か繰り返しているうちに、柵の中に小判一枚と鉄砲があるのに気がついたんでさ」

「金と鉄砲か……」

「どうも、ねず公どもが集まる時に引っ張って持ってきたらしいんですね。それから、あつしは必死になって、鉄砲と金の出所を探したんですが、まるで見つかりませんでした」

「おいっ、孫八」

突然、慎之介が一括すると、それまでの馴れ馴れしい態度が吹っ飛んで孫八は震え上がった。

「さては、城に出る幽霊というのはお前のことだな。正直に言え。お前が、隠し金を探して鵜城の廻りをうろついているのを通りがかったものが見かけて幽霊だと言い出した。お前はそれを面白がって、罪のない村人を何人か脅したのではないのか」

「か、勘弁を。ご勘弁を。その通りでございます。もういたしません」

「まったく、しよつがない奴だな。それで、その鼠は、今はどうなっている」

「へい、もう逃がしました」

「逃がしただと。いつだ」

「四日前でさ。それまでは、お殿様にいただいた金で、米を粥かゆに伸ばして、なんとかやってきたんですが、いよいよ喰うに困りましてね。それで、小銭が欲しいのと、あっしだけが財宝の幻に踊らされたのが悔しくて、読売の源吉にねたを売ったんでさ」

慎之介はまじまじと孫八を見た。この男は、三年近くも死んだ殿から頼まれた鼠のしつげを続けていたのだ。

もちろん、それだけではなく、城に隠されているであろう金と鉄砲が目当てでもあったのだろうが。

「それで、どこへ逃がしたのだ。まさか領内では無かるうな」

この時まで、卑屈に怯えていた孫八が突然にやりと笑った。

「そんなことはしやしません。もうすぐお殿様の三回忌ですからね。供養代

わりにあの方の望んでいたことをやったんでさ」

「どういふことだ」

「みつちり仕込んだ鼠どもを、狩場の柵から一匹残らず隣の川村藩へ送り込んでやったんですよ。あいつらは間違はなく向こうの米倉へ攻め込んで食い散らしたはずだ」

「なんだと」

思わず慎之介はそう叫んでいた。

ついで大笑いを始める。

それで合点がいったのだ。

数日来、川村藩の連中が獵場を越えて小競り合いを繰り返していたのは、そのためだったのだ。

かつて自分たちが行った鼠の嫌がらせに気づいた我が藩が、倍返しを行ったと思つてのことに違いなかった。

初めは、あっけにとられたように慎之介を見ていた孫八だったが、やがて、くすくすと笑いだし、しまいには二人そろって大笑いを始めた。

ひとしきり笑ったあとで、慎之介は床に置いた二朱金を掴んで孫八の手のひらに載せてやった。

「旦那」

金をぐっと握りしめて孫八が呟いた。

慎之介は、孫八の肩を叩くと、優しい声で言つてやった。

「孫八、よく話してくれた。約束どおり、これはとつておけ。それから、もう城の廻りをつろつくのでないぞ」

「あっはっは」

例によって、人気のない野崎神社の境内で落ち合つて、慎之介が孫八の話をする、随賢は大声で笑つた。

「猿回しならぬ、鼠つかいというやつか。一度、その孫八とやらに会ってみたかったな。しかし、おかげで、川村藩が隠し金を狙って、我が藩になだれ込んできたというのが杞憂きゆうであることがわかった」

「そうです」

「あとは、その孫八の鼠たちが見つつけ出した、小判と鉄砲の、もともとの在りかをわたしたちが見つつけねばならん」

「急がぬと、読売を見た者どもが、城を探りに出かけぬともかぎりません」

「まあ、それはあまり心配せずとも良い。町民たちに廢城に近づくと勇氣があるとは思えぬからな」

「では、いかがいたしましたしょうか」

「孫八は、隠し部屋があるといったのだな」

「真偽しんぎは定かではありませんが」

「もし、それが本当なら、いかに非凡な兄者として、自分の手で隠し部屋を造るわけにはいかぬ。これは、その部屋を造った大工を探し当てるのが手だ」

「では、早速、城の普請ふしんに携たづなわったことのある大工を捜し出し、そういった細工の得意なものに当たることにします」

「待て、慎之介」

慎之介が立ち去ろうとすると、随賢が引き留めた。

「わしは、旅に出て留守にしておったゆえ叶わなかったが、おぬしは、兄の死に様を見たか」

「とんでもない。わたしのよくな下々のものが、何で殿の死に目にお目にかかれましようか」

「そつだろつな」

随賢は肩を落とした。

三年前の、ある晴れた日、すぐに帰ると言い残して馬で出かけた忠勝公が、夕方になっても帰って来ないので、城内は大騒ぎになった。

剛毅こうぎをもって鳴る英邁えいまいの君主は、それまでにもたびたび単騎たんきで野行のゆきをし
ていたため、誰ひとりとして心配するものはいなかったのだが、深夜になっ
ても行く先が知れないとわかると、帰らぬ君主を捜して、五百人からなる
松明組たいまつが仕立てられ、夜を徹した捜索が続けられた。

何年も前にうち捨てられた山城で、忠勝公が全身黒こげに変わり果てた姿
で見つかったのは夜も明ける頃だった。

初めは、誰かに殺されたと思われたのだが、詳しく調べてみると、明らか
に自ら油を被つて火を点けた様子が見て取れたために、自害ということに落
ち着いたのだ。

重臣たちの働きで、幕府に対しては急病による病死と届出て、当時七歳だ
った勝治君を幼君に立てることで改易かいえきは免れた。

随賢は、しばらく黙り込んでいたが、

「もしかしたら、兄の死は、隠し金が元となっているのかもしれない」

そう呟いた。

慎之介が頷く。

随賢が、兄、忠勝の死に疑いを持っていることは、かねがね言葉の端々か
ら感じていた。

「そうであるならば、隠し金さえ見つかれば、誰が兄を殺したかも分かるに
違いない。慎之介、よろしく頼むぞ」

「わかりました」

翌日、随賢と慎之介は、そろって城下を歩いていた。

随賢が、普請奉行ふしん、室井上総むろいの守かみに当たって、鵜城の普請を受けた大工の
棟梁の名前を聞き出したのだ。

弥助という男は、坂上町さかうえちょうに住んでいた。

坂上町は、大工連中が多く住む町だ。

城替えがあつた時、君主忠勝公は、様々な職業のものを、まとまつた場所にかためて住まわせるように配慮した。

大工は、左官職や鳶職の近くに住み、料理屋は市の近くに作らされ、芝居小屋は料理屋の近くに小屋を掛けた。

同時に、それぞれの肝いりを決め、仕事の上で、争いが起きないように配慮もした。

その結果、金と人の流れに滞りがなくなり、町が活気づくことになった。そういつた点でも、忠勝公は並はずれた英邁の領主であつたのだ。

日頃、武家などあまり出入りしない場所であるためか、あるいは、いかにも医者然とした坊主頭の随賢と、見上げるばかりの長身である侍姿の慎之介が珍しいのか、二人が通りを歩くと皆が振り返って見送った。

「ここでしょう」

何回か人に尋ねて探し当てた家の前で慎之介は言った。

それは、表通りに面した、ござっぱりした家だった。

「あいすまぬ」

慎之介が、おとないをいれると、中から女の声が答え、からりと戸が引き開けられた。

予想外に美しい女が、そこに立っていた。

「ここに弥助という者がおるはずだが」

慎之介が尋ねると、女の顔が強張った。

武家姿の慎之介を見て、弥助になにかしくじりでもあつて成敗されにきたと思つたのかもしれない。

「何のご用でしょうか」

少し下ぶくれで、顎から首の線のきれいな女だった。

年の頃は二十四、五といふところだろうか。

「いや、以前に弥助に仕事を頼んだものでな。そのことで、少し聞きたいことがあるのだ」

宮大工と違い、弥助は城の普請も商家の家も請け負う大工だった。

「でも、お父つつあんは、随分まえに大工をやめたんです」

この艶うつくっぽい年増が弥助の娘だと知って慎之介は驚いたが、顔には出さずに続ける。

「いや、何も仕事のことで弥助を責めに来たのではない。少し尋ねたいことがあるだけだ」

それでも女の硬い表情は変わらなかった。

「おとよ」

奥の部屋から男の声がした。

「上がってもらいなさい」

おとよは少し心配そうな顔を見せたが、さっと裾すそを翻ひるがえすと、

「どうぞ、こすばへ」

そう言って、慎之介たちを奥へ案内した。

中に入ると、外から見ていたより大きな家だった。

簡単に挨拶を交わしてから慎之介がそう言つと、弥助は大声で笑った。

「昔は、大工の棟梁をしておりましたのでな。通いの者や弟子どもが大勢、

この家で寝泊まりしておったのですよ」

そういつて、おとよが持ってきた茶をがぶりと飲む。

弥助は、大工の棟梁といつても、乱暴でがさつな感じはせず、どちらかといえば、大店の主おおたなのような話し方をする老人だった。

その物腰に好感を持った慎之介は、回りくどい言い方をやめ、単刀直入に切り出した。

「普請奉行、室井上総の守様から、そちの名前を聞いて参った。実は、今日

伺ったのは他でもない、忠勝公が、城の普請で、どのようなことをそちに御命じになったのかを教えて欲しいのだ」

「そのようなことが、できるはずがないことは、あなた様もよくご存じのはず」

大柄な弥助はぴしりと背筋を伸ばして言い切った。

「お城というものは、その中に様々な秘密を孕みつつできあがっていくものです。もし、わたしども大工が、その秘密をべらべらと話してしまいましたら、たちまちお城は乗っ取られてしまうことでしょう」

なるほど、と慎之介は感心して見せた。

そして続ける。

「だが、拙者たちが聞いているのは、もうとうに住む者も居らぬ、あの山城、鵜城についてのことだ」

慎之介は、城の名を出した時に浮かんだ老人の狼狽を見逃さなかった。

「存じませんな」

随賢が身を乗り出した。

「そこを曲げてお話しただけまいか」

弥助は、医者姿をしたこの立派な風采の男を見つめた。

誰なのだ、という目で慎之介を見る。

慎之介は声をひそめた。

「そなたも知っておろう、この方は、忠勝公のご実弟、野崎随賢殿だ」

老人は驚いて居住まいを正した。

「知らぬこととはいえ、申し訳ありませんでした」

「気にせずとも良い。それより、兄は、そなたにあの古びた山城で何を造らせたのだ。それが聞きたい。いや、実のところ、だいたいは分かっているのだが、細かいところが分からぬので、おぬしの口から直接聞きたいのだ」

老人はしばらく畳を眺めていたが、意を決したように口を開いた。

「このことは墓場まで持って行くつもりでしたが、他ならぬ、あなた様がお聞きになるのでしたらお教えしましょう」

「つむ。よくぞ言ってくれた」

「ご存じのように、かの城は高峯山の中腹で、断崖にとりつくように建てられております」

「そうなの」

「鵜城は、三十年前に川村藩がこの地を平定した時に普請した城です。背後を険しい崖に守られ、前方も遙か遠くまで見渡ることができ、誠に戦には適しております。しかし……」

「戦にあつては鉄壁の城でも、平和の中にあれば、山城ゆえの不便さのみが目につく、そうだな。だから兄者は麓の平地に城を普請したのだ」

「そうでございます。今のお城は、わたしの弟子が普請いたしました。その折りには、わたしも図面を引かれた上総の守様から幾度と無く相談をお受けしたものです」

「それで、鵜城のはなしたが」

随賢は、横道に逸れそうになる老人の話を元に戻した。

「はい。新しく平地に城をお作りになったあと、山城はそのままうち捨て置かれるということになったのですが、かねがね、わたしはそれは勿体ないことだと考えておりました」

随賢は頷いた。

「拙者にとつても、今の城より鵜城のほうが思い出深い。だから、兄が山城を取り壊し、材木など、使えるものは使おうというのを止めたのだ」

「天守閣なども小振りでありながら、威厳のあるものですからな」

老人はそういつと、茶をすすってひと息いれた。

「あれは殿がおなくなりになる二年前のことですから、五年前になりましょつか、お城から使いの方が参られまして、すぐに鵜城に参れとおっしゃられ

たのです」

「殿が直に、おぬしに会われたのか」

「そうでございます。いやはや驚きました。なにぶん、そのまじなごとは、かつて無いことでございますからな。」

この地に移り住んだ頃は、城の普請などで忙しく立ち働いたものでござい
ましたが、それはすべて普請奉行の上総の守様を通しての仕事でございます。
わたしのような者が、殿に直接お目にかかったことなどございませんで
した」

「それで、兄は何と申された」

随賢は身を乗り出した。

そこで、ぶつとりと老人は口を閉ざした。

慎之介と随賢の顔を交互に見比べる。

なおもしばらく迷っているようであったが、やがて口を開いた。

「お殿様は、突然お亡くなりになりました。ですから、この話を誰にお話す
ればよいのか、あるいは、してはいけないのかがわたしにはわかりません。
しかし、あなたは殿のご実弟であらせられる」

「そうだ、兄に一番近いわたしが知りたいと申しておるのだ。もし、城に何
らかの秘密があるなら、兄はきつとわたしに知らせたいと思っていたことだ
る」

随賢の言葉に、老人は頷いた。

「わかりました。お話いたします」

老人が、藩主、秋津大輔忠勝に呼び出されたのは、寛永元年、春のことだ
った。

約束の刻限に、呼び出し状どおりに供を連れずに鵜城に赴くと、荒れた城
門の前で、中背で髭を生やした男が待っていた。

その男は、顎をしゃくると、弥助の前に立って歩き出した。

転封なった後、すぐに手入れを仰せつかったために、弥助は、山城の中を良く知っている。

急な階段を上がり、ぐるっと右に迂回をしてさらに階段を上がると、昔から月見門と呼ばれている、三之門さんのもんにたどり着く。

その門をくぐると、城の本丸は目の前だ。

「ここだ」

月見門の右側の壁を叩いて忠勝公は言った。

「この壁の向こうに、小部屋を造ってもらいたい」

「しかし、この山城はもうお捨てになったのではないのですか」

「事情があつて、再び使うことにしたのだ。もちろん、一部分だけはあるがな」

「小部屋と申しますと、監視でもされるのですか」

「いや、大切にしまっておきたいものがあるのだ。それでな、弥助」

「はー」

「その扉は、一度閉めてしまつと、外からはどうやって開くか、わからないようにしたいのだ。できるか」

「できます」

ひと月かけて、その隠し部屋は完成した。

「棟梁を迎えた男というのはどんな髭を生やしていたのだ」

慎之介が尋ねた。

「俗に言う八の字髭です」

老人の答えて、慎之介と随賢は目を合わせた。

「前にどこかでその男を見たことはあるのか」

「はいませぬ」

「わかった」

「そなたは、隠し部屋を造った。それを、決して他言無用だと兄は言ったのだな」

今度は随賢が尋ねる。

「そうです」

随賢は顔を上げ、慎之介を見た。

その目は、きらきらと怪しい光を宿し始めたように見える。

長い付き合いになるが、そんな目をした随賢を、慎之介は見たことがなかった。

その激しすぎる目の光りに、慎之介はふと見てはならぬものを見てしまったような気がした。

「これで決まったようだな」

外に出ると、日はとつぷりと暮れていた。

「出かけるのは明日になりそうだ」

随賢が言った。

「それでどうします。壁を壊したり荷物を運ぶために、人数がいるかも知れませんので何人か呼び集めますか。普門しんもん院道場には、口の固い、信用できる者もおりますが」

「いや、事が事だけに、慎重に運んだ方がよいだろう」

随賢は我々二人で出かける事にすると言った。

翌日、昼前に随賢と慎之介は、鵜城の前に立っていた。供は一人も連れていない。

「ここに兄上が残された金がある」

そう言った随賢の顔を、慎之介はじっと見た。

ここ昨日来、随賢の顔つきが変わったように慎之介は感じているのだ。藩を救う黄金、あるいは鉄砲大砲おほづつという考えが、この大らかで陽気な男の頭をおかしくしているように思えてならず、一抹の不安が慎之介の心をよぎり始めていた。

弥助が書いた図面にある通り、月見門横の壁は、漆喰しっくいで塗り固められていた。

「ここだ、この中に兄が隠したものがある」

そういって、随賢は、壁の前の庭石を動かすと、その後に見れた空洞に手を突っ込んだ。

がきりと音がして、何かが外れた感じがする。

「壁を押して回すのだ」

随賢が叫んだ。

慎之介は、壁に体当たりし、渾身の力を込めた押しした。

背筋を撫でられるように気持ちの悪い軋きしみ音を残して壁は回った。

中から湿った空気が流れ出してくる。

部屋には、藁や薪などが高く積み上げられていた。

今、開いたばかりの扉以外に光の入る口はなく、中は暗かった。

「明かりがいるな」

そういって、随賢は、転がっている粗朶そだと薪をまとめると、松明たいまつを二つ作った。

旅慣れているためか見事な手際だ。

松明に火をつけると、一つを慎之介に渡し、部屋に入った。

隠し部屋は結構広かった。二十畳はあるだろう。

天井も床も板張りだった。

薪と農具、それに藁が積まれて、ひと目見るだけでは納屋といった感じの

部屋だ。

「調べてみてくれ。特に、部屋の隅を詳しく」

随賢の言葉で、慎之介は壁沿いをゆっくりと廻り始めた。

「あつたぞ」

半分まで調べた時、随賢の声がした。

近づくと、随賢は、壁の一部を押して隠し扉を開き、その向こうの小さな梯子を見せた。

「これですか」

「そうだ。いこう」

そういつて、随賢は梯子を降りていった。

下の部屋はそれほど大きくはなかった。

高さは一間半（役二・七メートル）ばかりで、広さは十畳ほどだった。

「なんだここは」

まわりを石で囲まれているためか、その声はよく響いた。

随賢に続いて地面に降り立った慎之介は、なんだか嫌な予感がした。

「武器らしいものはありません」

「金もなし、か」

部屋の真ん中には、井戸のようなものがあった。

その廻りに籠かごのようなものが置かれている。

「あ」

慎之介は叫んだ。

「ここに骸ういごがあります」

死体はすっかり乾燥し、ほぼ木乃伊になってしまっていたが、顔にわずかに残る肉には、八の字形の髭がまだついていていた。

「これが、孫八と弥助が見かけた八の字髭の男か」

「閉じこめられたのでしょうか？」

随賢は死体の体を探った。

「いや、腹を刀で串刺しにされている」

慎之介は、松明を持って部屋の壁に沿って歩いてみた。

「ここに柄杓ひしやくがあります」

「この井戸に使うのだろうか」

そういつて、随賢は井戸に近づいた。

井戸は、鉄の板で蓋がされていた。

「こいつを動かしてみよう、手伝ってくれ」

鉄板は重かった。

屈強な二人の男が渾身こんしんの力を込めても、わずかばかりしか動かない。

「どうやら、この井戸の中に黄金を隠しているようだ」

随賢の言葉に力を得て、慎之介は一息に鉄板を井戸の縁から床に投げ落とした。

ぐわらんという音が部屋中に木霊こだまして、しばらく耳が聞こえなかった。

随賢はすばやく井戸に近づいた。

身を乗り出すように中をのぞき込む。

慎之介は、昼過ぎに食い残した握り飯を懐から取り出すと、井戸に投げ込んでみた。

水のはねる音がする。

「下に水がある。しかもかなり水かさがあるようだな」

随賢が呟いた。

「これで、隠された武器が鉄砲だという考えはなくなりました」

慎之介の言葉に随賢が頷く。

刀であろうと鉄砲であろうと、水の中に隠すことはできない。

「すると、黄金か。だが、なぜ水の中に隠すのだ」

「もともと洩れ井戸であったのが、知らぬ間に水が湧き出たのかも知れませ

ん

「そうかも知れぬ。いや、水は最初からあったはずだ」

「なぜです」

「柄杓があるからな。では、少し中を掬すくってみよう」

そういって、随賢は柄杓を手にした。

柄杓は、結構長く、一丈（一・八メートル）以上の長さがあった。

それを井戸にいれ、しばらく中を探ったあとで、水ごと引き上げる。

「なんだ」

石畳の上に掬すくい出した水は異臭がした。

刺すような臭いではないが、生臭い。

再び柄杓を井戸に入れ、動かすうちに、コツコツと何かに当たる音がした。

「何か硬いものがある」

そういって、手首を返し、何度か動かすうち、

「よし、入った」

随賢は一息に柄杓を井戸から引き抜いた。

ざっと音をさせて中身を床に撒く。

「……」

その刹那、慎之介の背筋が凍り付いた。

それは人間のしゃれこうべだった。

だが、さすがに医師の随賢は冷静だった。

明かりを近づけて子細に調べ始める。

「人骨じゃな。頭だ。それ以外に腕や足の骨もある」

随賢のつぶやきに、慎之介の頭にあった、漠然とした考えが徐々に形を取

り始めた。

「ほう、この小さいのは動物だな。鼠か」

その言葉で慎之介の頭の中に火がついた。

「上へ出ましょう。早く。外へ出るんです」

声を裏返して慎之介は叫んだ。

「どつした」

「ここには宝なんてありません。早く」

狂ったように叫んだ慎之介は、梯子に飛びついた。

「待て、慎之介、宝を埋める時に、口封じに人夫と一緒に埋めることはよくあることだ。確かに、兄には似つかわしくないが」

梯子を必死に上がりながら、慎之介は叫んだ。

「分からないんですか。そのしゃれこうべは、多賀村の農民のもですよ」
呆然とした顔で、その言葉を飲み下すと、随賢も悲鳴を上げて梯子にとりついた。

上の部屋に出ると、慎之介は松明を投げ捨てて、ほとんど這うように漆喰の部屋から外に飛び出した。

少し遅れて随賢が飛び出て来た。

地面に転がって、唇に食べた握り飯を吐き散らす。

今は、随賢より慎之介のほうが少し落ち着きを取り戻していた。

腰に差した竹筒の水を飲み、随賢にも飲ませる。

しばらくすると随賢も落ち着いてきた。

それでも、地面に座りみ、股の間に首を落とし込むようにして震えている。

やがて、随賢はかすれた声で言った。

「あれはいつたい何なのだ」

慎之介が暗い声で答えた。

「あれが隠し財産の正体でしょう。財宝や隠し金など最初からなかったのですよ。鉄砲も大砲も……」

「兄者は、あの暗く湿った井戸の中に、病気で死んだ者の骸むくろを投げ入れて、病の巢を作り出したのか。だが、信じられぬ。なぜ兄者は流行病はやりやまいを閉じこめ

て、そんなものを作ろうとしたのだ」

うめくように慎之介が答える。

「毒です。殿は毒を作ろうとされたのです。流行病はやりやまいの素は金のかからない唯一の武器です。しかも、誰からも使ったことが気づかれない。金もなく鉄砲もない中で、隣国川村藩と対等になるためには、何でも良いから武器となるものが必要だった。だから、殿は毒を作られた。それも一村、一国を滅ぼし兼ねない猛毒を。恐ろしいことです。うまくそれを相手の土地に撒くことさえできれば……」

「まさか」

随賢は呻いた。

「それが山鼠やまねずだということか」

慎之介は頷うなづいた。

「さきほど井戸の中から鼠の死骸が出てきた時にはつきりとわかりました。忠勝公は、鼠を使って川村藩に疫病を広め、最後には藩取りつぶしを考えておられたのに違いありません」

「ひょっとすると」

頭を抱える随賢の目が、かっと見開かれた。

「野副川の治水も、そのためか」

「そうですね。疫病は川を通じて広がります。ですから、殿は川村藩から流れて来る野副川を、是が非でも城下を通すことはできなかつたのでしよう」

慎之介の声は低かった。

「兄者はどうして死んだのだろう」

随賢はぼつりといった。

「分かりません。ですが想像することはできません」

「言ってみてくれ」

「おそらく、殿は、最後に恐ろしさに気づいて、この毒を使うことをやめようと思われたのではないでしょうか。だが、ただ辞めるわけにはいかなかった。うまく毒を利用するために雇ったあの八の字髭も処分しなければならなかった。あの男はおそらく医者でしょう。だから殿は、外に声が漏れないように、井戸の横で男を切った」

「すると、孫八も殺される場所だったのだな」

「そうですね」

慎之介は呟き、

「ここからは、本当の推量です。ですが、おそらくはそれほど外れていないでしょう」

そう言って慎之介は続けた。

「斬られたが、男は死ななかった。そして、柄杓を井戸につけると、思いきって中身を忠勝公に投げつけた。忠勝公は全身に疫病のもとを浴びてしまっ
た」

「そうか、だから、兄者は油を被って火をつけたのか。町に病を広めぬために……だが、鉄砲と金は、たしかに孫八はそれを見つけたのだぞ」

「本当のところはわかりませんが、しかし、考えてみると、鉄砲は忠勝公が野
行ゆきの際ときに持って出られたもので、月見門近くの置かれていたものではない
でしょうか。おそらく金も殿が持っておられた」

「おお」

その時、随賢が叫んだ。

慎之介が物思いから覚めて顔を上げると、漆喰しっくい部屋から火が噴き出すのが
見えた。

先ほど投げ捨てた松明が、部屋の中の薪そだや粗朶そだに燃え移ったのだろう。

火はすぐに大きく成長し、壁を這うようにして城に燃え移っていく。

「行きましょう。煙を見て、じきに人がやって来ます」

徐々に燃え盛る炎に包まれていく城を見ながら慎之介は言った。

だが、随賢は呆然とした面持ちで炎を見続けている。

「黒滝村に行けば小屋があるはずですよ。少し下れば獵師小屋もある。おそろく食料もあるでしょう。それでなんとか十日ほど暮らせるはずですよ」

「なんだ」

ようやく随賢は顔を上げた。

「何を言っている」

穏やかに慎之介は言った。

「まさか、このまま城下に戻ることはできないでしょう」

「どうしてだ」

今、随賢の顔からは、英邁の表情が薄紙を剥がすように剥がれ落ちつつあった。

その下から、醜い保身に走る獣じみた顔がのぞき始めている。

「いいですか、あなたは医師だ。流行病に罹ったかも知れない体のまま、町に戻ることはできないことはおわかりでしょう。せめて十日はここで過さない」と

慎之介の言葉に、噛みつくように随賢はいった。

「しかし、わしもお前も、井戸の水には触れてはおらぬぞ。第一、あの井戸に溜められていた病が、空を飛んで伝染るものだとに限るまい」

「その通りです。忠勝公ほどの方だ。直接触れたり、飲んだりしない限り伝染らない病だけを集めてあの井戸を作られたに違いない。ですが、どこにもその証がない。だから、私たちはただ時が経つのを待つしかないのです。まあ、心配しなくても大丈夫ですよ。すぐに結果はわかります」

随賢はうつむいた。

だが、しばらくたって顔を上げた時には、その顔は悪鬼のようになっていた。

「だめだ、わしはすぐに屋敷に帰る。帰って、以前より作りおいた毒消し薬で手を洗い、うがいをし、滋養強壯じようぢゆうぢゆうの丸薬を飲むのだ」

慎之介は首を振った。

「なあ、慎之介、そうしよう。そうするのが一番良い」

「駄目です。あなたとわたしはここに残るのです」

慎之介が言い終わらないうちに、いきなり随賢は刀を抜いた。

鬼神のような早さで斬り込んでくる。

後ろに飛び退いて、危つく剣先を外した慎之介であったが、袖の一部を切り取られる。

「おやめください。随賢どの」

しかし、随賢は無言のまま、青眼せいがんに構えた。

仕方なく慎之介は上段に構える。

まるで、十年前の再現だった。

あの時は、三度の勝負が三度とも勝負がつかなかった。

だが、今回は、そういうわけにはいかない。

もし自分が負ければ、随賢は病に罹かったかも知れない体のまま城下に下りて行くだらう。

何としてもそれは止めねばならなかった。

小さく円を描きつつ後ろに下がった慎之介は、一瞬の随賢の構えの乱れをみて、左に踏み込みざま、鮮やかな袈裟斬りけさを行った。

だが、随賢の足裁きは相変わらず見事だった。目にも留まらぬ早さで、半歩後ろに下がると剣先をかわす。

だが、今回の慎之介の技は十年前とは違った。

いったん切り下げた切っ先は、慎之介の気合いもるとも、細かく左右にくねらせながら真上に跳ね上がったのだ。

刃でそれを受けようとした随賢であったが、果たし得なかった。くねる刃に惑わされて目測を誤ったのだ。

剣技は互角、あるいはわずかに随賢のほうが上だったが、慎之介が自ら編み出した技が勝ったのだった。

深く切り裂く手応えと共に、声もなく随賢は崩れ落ちた。

「こ、これは」

口から血を吐きながら随賢が呟いた。

「二年前に、川を上る鮎をみて編み出した技です。名付けて『戻り鮎』」

「み、見事だ」

そう言うと、随賢は激しく喀血し絶命した。

慎之介は座り込んだ。

激しく方で息をする。

しばらく呼吸が満足にできなかった。

やがて、のろのろと立ち上がると、慎之介は、随賢を担いで黒滝村へ向かって歩き始めた。

振り返ると、城から吹き上がる炎はさらに勢いを強め、今は、窓から拭きだした火が、小振りな天守閣を嘗め上げていた。

その狂ったように踊る火は、名君と言われた忠勝の、心に隠された狂気を示しているようだった。

忠勝は、小国であることを侮って侮蔑を繰り返す川村藩を許せなくなっていたのだらう。

国を愛し過ぎていたのだ。

慎之介は、底なしの虚脱感に捉えられていた。

抱えた随賢から流れ出る血が体を伝って足に流れ落ちて行く。

炎を背中で感じ、よろめきつつ山を下りながら、慎之介はお里の顔を思い出していた。

もしも、そう、もしも十日が過ぎて、病が表に出なければ、徳正に寄ってお里の酌で酒を飲もう。

不意にそう思った。

お里の笑顔と甘い匂い。それがたまらなく懐かしかった。

そう思うことで、ようやく崩れ落ちそうな心をしっかりと立たせることができるような気がしたのだ。

その時、轟とんという凄まじい音が背後で轟とんいた。

振り返ると、古木が朽ちるように、火の粉を巻き上げながら城が崩れ落ちるところだった。

△了△